

倉院の薬物」の中にみられた「巴豆」は唐産となっていて、和名はない」などの例もあげられている。

## 2 民間薬の普及

加持祈禱か 門として勢力を伸ばした。奈良では藤原氏の氏寺としての興福寺が力をつけはじめた。

新しい都の京都でも相変らず疫病やききんが、つぎつぎとおこった。しだいにおとろえた律令制度では医療による救済もままならなくなってきていた。それでも医薬を与えることはあっても、防疫が果せるわけではない。貴族たちは争うように高僧をまねいて加持祈禱をねがい、悪疫が去るように祈ったのである。

こんなようすは世が鎌倉時代になっても、変わることはなかった。京都では、ひきつづいて、さきの『医心方』を編んだ丹波家は名医のほまれを得ていたようだ。『吾妻鏡』には、源頼朝の娘乙姫が病気になる時、諸寺に祈禱しても回復しないので、京都から針博士丹波時長を招いたとある。時長は乙姫に朱砂丸を服用させて、一時的には容態が良好になった。しかし、間もなく悪化した。時長はそれを凶症とみて、鎌倉から京都へ戻ったのである。やはり乙姫は死亡したが、そのころは薬石が効果ないと判断すると、あとは僧侶や陰陽師の祈禱にたよるのであった。鎌倉の將軍のもとでは、その後も丹波家を迎えて、薬の処方にあたらせている。

鎌倉の要人らは特別に名医と称されていた人にとよることができても、多くの場合はそんなことはできなかった。また、京都では『玉葉』の著者九条兼実が持病の脚気で灸治や湯治をすることがあった。兼実は上級者であるから京

医師が訪れて治療をすませることがあったが、中年からは、しばしば風病を患った。これは服部敏良氏の考えによると、兼実は脚気から付随した多発性神経炎であったという。それで兼実は鍼<sup>はり</sup>や薬物をも試みている。この場合の薬物とは蒜<sup>にんにく</sup>や呵梨勒散<sup>かりりくさん</sup>である。

また、兼実は、こんなことをしたら笑われるかも知れないがといい、筑紫の僧医大善房を招いて灸治療をしてもらった。大善房は民間医としても知られた人であったようだ。兼実はその後、仏敝上人と親交ができたが、治療のことは上人にまかせていた。

藤原定家の生涯も喘息と脚気に苦しんだ。定家の八〇歳の人生は当時として長いものであったが、『明月記』には、いろいろな病気が記されている。定家が信頼したのは僧心寂房で、灸や湯治のほか多くの薬物を使い患部の手あてをした。定家は心寂房を信頼して、知人にも紹介したりしたが、定家が七〇歳のときに心寂房は死亡した。定家は大人落胆した。

これらのことから、もはや高僧のみならず下級の僧侶にも医学知識をもち、庶民の病いの治療をするものが各地にいたことがわかる。

#### 薬としての茶

茶は古くから日本に自生したという説があるが、はっきりしたことはわからない。中国では七六〇年(天平宝字四)に陸羽が『茶経』をあらわしている。唐文化が、ぞくぞくと輸入されたわが国で茶を薬用として使用することも知られ、いわゆる喫茶の習慣もできたとおもわれる。僧侶の読経のあと、茶を賜わり、アマヅラやシヨウガを入れて飲んだようだ。

しかし、いまにつづくような喫茶の用法は留学僧の栄西(一二一四—一二八二)が茶の種子を日本へもちかえり、九州の背振

喫茶養生記序

宋法前權僧正法印大和尚位 榮西錄

茶者養生之仙藥也延齡之妙術也山

谷生之其地神靈也人倫採之其人長

命也天竺唐土同貴重之我朝日本亦

喫茶養生記

山そして<sup>上つ</sup>梅尾の高山寺に植えたということからであろう。榮西は禪の布教を通じて喫茶の法を広めたのであった。一二二一年（承元五）には『喫茶養生記』をまとめたし、一二二四年（建保二）には將軍源実朝の体調の崩れは二日酔いと思ひ、茶を献じた話は有名である。

『喫茶養生記』のはじめに榮西は「茶は養生の仙藥なり、延齡の妙術なり」と書いた。榮西は養生の源は肝・心・肺・腎・脾の五臓の調和と説き、それを保つことは長命の秘けつである。五臓のなかでも心臓は中心である。心臓には苦味を与え弱らさないようにする。そのために茶は妙藥として愛用しようというのであった。さらに日本には茶は藥でないというものがあるが、それは茶の徳を知らないものということだともいきっている。なお、同書の終りに、桑の藥法を述べ、桑粥・桑湯は中風・瘡病・脚氣にもよいとし、万病の靈藥とほめている。

榮西は東大寺大勸進になったことがあるし、梅尾に茶園をひらいた明恵上人（一二七三）は南都にも関係がある。したがって、大和の寺院では茶の栽培が広まった。西大寺の叡尊やその弟子たちによって、律宗寺院に茶園の開植がはじまり、茶の改良もあった。そんなこともあって般若寺や室生寺が大和の茶の産地として知られるようになった。

叡尊らの救療

荒れはててしまった西大寺を再興し、授戒活動と救療事業に日夜奔走したのは叡尊（一二〇一）であった。叡尊は大和添上郡の生まれ、京都醍醐寺や東大寺で修業し公家・武家の帰依をうけ、元寇の



叡尊座像



北山十八間戸

国難祈願で名声をあげた。かれは執権北条氏の後援で鎌倉や近畿の大小寺院をつぎつぎと興隆させている。大和では室生寺・三輪寺（大御輪寺）・長弓寺・法華寺・海竜王寺・般若寺・白毫寺・元興寺極楽坊・大安寺などが叡尊によって中興された。これらは真言宗寺院であったが、律宗を兼帯し、真言律宗の本寺が西大寺という立場になった。これまでの旧仏教は朝廷や貴族権門の庇護をうけ発展したのにくらべて、真言律宗の叡尊は、名主や荘官という新しい社会の中核となる勢力から積極的な浄財を得た。これらをもとに真言律宗寺院では社会事業として施療院の開設や橋梁の架設などに努力した。叡尊が、かの天平時代の行基の再来とあがめられたわけである。

さきの薬としての

茶の大ばん振舞いは、律院の、わけても西大寺の行事として、のちに定着し、いまは観光行事化した大茶盛である。

叡尊の弟子にあたる忍性（一三〇三）も、大和磯城島の人である。戒を東大寺で受

け、西大寺に住み、救療事業にはげみ、鎌倉の極楽寺のもとで関東の布教と社会事業につくした。かれの数ある活動のうち、いまは史跡となった北山十八間戸せんどは僧忍性が病患者救済のために建てた宿舎である。不治の病いとそのころは信じられた人たちは、行き場を失い路頭に迷い忍性らに施薬された。このことは『元亨釈書』にくわしい。

忍性のあと、真言律宗教団での、大々的な施薬や病者の治療行為は消滅したようだ。それぞれの寺院では寺内で伝承され、調剤した薬が求めによって提供されたほどのことであつたらう。

#### 医薬調剤古抄

一九八八年（昭和六三）二月二日の各新聞は法隆寺で、五三種の漢方薬の処方を書くわしく書いた鎌倉末か南北朝ごろの巻物がみつかったと報道した。

巻物は、寺宝の総合調査、昭和資財帳づくりで経巻類を調べているときの発見という。タテ三〇センチ、長さ七センチで、巻首部はすでになくなっていて、題は不明、そのうえ巻末の奥付もないので、法隆寺では調査担当の田中稔氏や渡辺武氏と協議して「医薬調剤古抄」と名づけた。

巻子は表に声明しょうみょうの歌詞と譜が書かれ、いわゆる僧医が使った「とらの巻」らしいとのことである。薬は五三種のうち、三九種はこれまで知られないもので、中世の医療水準や僧医の実態を示す貴重な資料となった。その薬名は具体的な症状ごとに、調合のぐあいがかたかなまじり文で書いてある。

調査にあたった中医薬研究会長の渡辺武氏の解説では薬の処方が五三種で、使った生薬は八二種になり、そのうち約八割は外国産の高価薬とする。とうぜん、貴族らの上流階級向けのものか。そのなかでも、乾姜かんきょう（乾かしたシ）・朝鮮人参・甘草・桂皮・大黄などは、現代漢方でも使っているものである。

同氏は巻子の処方の中から「二十八の風ふう」神経症にきく」と四一行にわたって記された「訶梨勒丸かりりく」を、じっさい

いに調合した。これはインド産の木であるカリロクの実など一三の生薬をませあわせるものである。この調合によつたものを漢方の愛好家が試みたところ「下剤によい」「通じがよくなった」との結果がでたらしい。

なお、五三種の処方のうち一四種は、さきに述べた医学全書『医心方』にある唐式の処方であるが、あとの三九種はその出典が不明と渡辺氏はいふ。それにたいして、楨佐知子氏は「…医心方とは別な流れのもの」(『圖書88・7』)でと発表された「医薬調剤古抄」に、「医心方と重なる処方がこの他にもいくつかあるのだ」と述べている。そして、同氏は「医薬調剤古抄の年代の決め手となったのはその中にある『忠景朝臣注文京医師也』という記述であった。忠景とは丹波康頼の子孫丹波忠景のことで、一三三〇年から元弘の変(一三三二)の直前まで典薬頭の任にあった人物である。これによつて、南北朝時代の文書であることが判明した」と紹介されている。

また、三条公忠の『後愚昧記』の一三四六年(正平二二)の五月の条には、大峰の薬草が京都の公卿たちに迎えられたとある(『奈良県薬業史』資料編二七頁)。

大和の寺院には、今回の発見のように寺院医薬の秘書がまだまだ埋もれているのだろう。

もちろん、古くから口誦伝承されつづけてきた薬もある。たとえば陀羅尼助は大和では忘れることができない。六三四年、葛木の茅原の里(いまの御所市吉祥草寺のところに)に生まれた役小角(えんのおすま)(役行者)は呪術をもち葛木山に住んだという。鎌倉時代以後は修験道の開祖とあがめられるようになった。そのかれが大峰山中で、黄蘗(きはだ)の生皮やセンブリの根などを煮つめて創製したというのが陀羅尼助の縁起である。霊薬として代々にわたって珍重されたことは後述される。

多聞院日記に 都である京都をとりまく世界には公家らの日常のくらしをうかがい知ることができる日記類が残つていられる薬 ている。大和には古代以来の社寺が多いにもかかわらず、意外なほどに、大和の中世社会のくらし

を知る手だては限られている。そんななか、日々のこまごまとした生活くらしを垣間見ることのできる『多聞院日記』をとりあげた。

いうまでもなく、興福寺は中世大和に君臨する一大宗教王国の頂点にたつて權威を誇った。その子院の多聞院で日々のくらしを書きつづけた学侶がいた。学賢房宗芸・妙喜院宗英、なかでも一ばん期間のながいのは多聞院英俊であった。原本は散逸したが、後世の写本をもとに今日では活版本にまとめられている。日記の全容は一四七八年（文明一〇）から一六一八年（元和四）までで、中世末から近世にいたる社会変革期の史料として貴重なものである。

多聞院日記には日常のくらし向きのかずかずの事項が書かれているが、なかでも薬のことが案外に多い（奈良県薬業史資料編二七、六頁）。いろいろな薬を英俊自身が服用したり、薬を所望する人たちに与えている。まず、薬名としてあらわれているものを拾い出してみよう。

香儒散、豊底丸、香蘇散、平胃散、尽心丹、阿伽陀アガタ、香禾散、嘉香散、禾嘉散、蘇合円、潤躰円、白朮散、牛黄円、牛黄丹、牛玉円、牛玉円、雷丸、開心丸、和中丸、杜仲丸、春辰丸、豊心丹、脊娥円

このような〇〇散、〇〇丸、〇〇円などと名前が出てくるが、あきらかにあて字や上下の文字が入れかわっているものも、そのままにあげてみたわけである。それにしても何と種類の多いことか。それらのうち若干の薬についてみることにしよう。

平胃散はよく用いられた薬である。「此ノ薬ハ、日本ノ方也、興正菩薩ノ、医師ニ談合シテ、不弁ノ客僧ナド朝腹ニテ乞食ニ出ル時、風ヲ不引、飲食ヲ能クス、メ、氣力虫等ニ可然タヤスキ薬何カアルベキト被ニ仰付、此ノ薬可然旨依ニ異見申スニ、世ニ流布云々」（天文十三年八月四日条）とみえる。

禾嘉散は、医師意齊のことばとして「膈ヲ煩、脾胃ノ煩ニハ禾嘉散ニ過タルハ無之」(天正十九年九月十日条)と述べている。蘇合(舌)円は相当に流布したようだし、阿伽陀薬も同様で腹わずらいに使用したほか贈答用の薬であったのか、手軽にやりとりしている。潤躰円は「中風無双の靈薬」(『新礼往来』)とか「奇特の良薬、神妙驗徳」(『尺素往来』後述)とか、いわれ、救急薬、老病の治療薬、中風薬として用いられたから、贈答・餞別の品として公家日記類にかなりあらわれる。

西大寺の豊心丹(別項)は『多聞院日記』にはどうしたわけか、ほとんどでてこない。牛黄円は多量に製造していた。『多聞院日記』にみられる和中丸はのちの江戸時代に板行された『近江輿地志略』や『撰津名所図会』にでてくる和中散の先駆になったのかも知れない。

#### 多聞院の製薬

多聞院の学侶ら、わけでも英俊は各種の薬を常備服用したり、贈答用にあてていた。そして、いろいろの薬をみずから調剤している。「養性薬調合了」「薬合」などの文字がしきりにでてきている。じつにこまめに薬事につとめていたといつてよいだろう。

たとえば、天正十六年(一五八八)六月二日条には需要の高かった香薷散の薬法を書いている。

香薷散合了、カウシニ四兩、火忌コウモリ二兩ヨクイル、白ヘンツ二兩、イリテ皮ヲ去、黄蓮入ル、流在之、不入カ吉也ト云々  
そして服用薬に限らず、膏薬の製法も書き残している。たとえば永禄八年(一五六五)八月六日条には、くわしい処方がある。現代文に書きなおすと、つぎのとおりである。

膏薬練りおわる。脂を二斤十文ずつ、油つぎに三ばい、古酒二はい、煎物を五はい、黒焼五はいを入れる。煎物とは青い葉で、いのこつちの根、栗のあまはだ、木通、杉の葉、せきしょうの五種で、百目ずつを水八升分に入れて二升ほどになるまで煎じる。



黒焼はいのこずち、青い葉、木通、くちなしの実の四種を百五十目ずつ焼いたもの。

永禄十年二月八日の条には痔薬の調合も書いてある。

紅花、槐花、当帰尾、白木、羌活、檳榔子、香付子、連瀉(なかの筋をとって)、甘草煎シ汁ニ少之間ツケテ毒ヲ取テアフル等分  
痔ノ煎物事、エンシユノ木・一熟、何モ一薬ニモ吉又デユウヤク根、ハコヒ、ハスノ葉入テ交セ合テモ吉

ほかにも、いろいろの薬法を知人に教えられて試みたりしている。ここではそれらの全部を抜き出さなかったで、資料集を参照していただきたい。

これだけくわしい医学知識はどこで得たのであろうか。さきの『医心房』以来、薬法はあるていど知られていたことはたしかであろうが、これについては、いわゆる「往来もの」の流布をあげなくてはならない。各種の往来ものは平安時代末ごろから江戸時代おわりごろまで庶民用教科書として発達したことはよく知られている。早くには『明衡往来』『東山往来』があり、医薬知識をもりこんだものも出まわる。そして、『庭訓往来』『尺素往来』などの数が多い。

なかでも『庭訓往来』は室町時代はじめの作とみられ、僧玄恵の著述というが、にわかには信じにくいようだ。このことは別にして、『庭訓往来』は広く、かつ永く愛用された。その内容は手紙の進状と返状を一对にし、一年を各月に配し、それに閏八月の進状一編を加え合計二五通にしてある。この各通はこれまでの貴族の教養・学問の教材を捨てて、武士や庶民の日常の活動に必要な心得をもりこんでいる。その一一月の往復二通に医薬のことが書かれていて、心気・腹痛・虚勞などのことを教えているのである。

『尺素往来』は応仁の乱(一四六七)で邸宅を焼失し、その子の興福寺大乘院尋尊をたよって、奈良に疎開した一条

兼良(一四〇二—一四八二)の撰といわれる。当代随一の学者であった兼良は、常備薬のことにもくわしい人であるから、さらに興福寺内でも薬法を教わったことだろう。

こうして、一般庶民にまで、往来ものなどを通じて医薬そして養生法が普及したようだ。養生といえば、『多聞院日記』にも養生薬のことがみられるし、湯治・薬湯も教えている。それに、おなじ興福寺大乘院の経覚も、五木八草、つまり梅・桃・柳などの五木と、菖浦・車前クルマゼ・荷葉ハス・艾葉ヨモギなどを入れた薬風呂の効用を信じ、浴していたという。

### 薬屋と薬価

京都の東市には早くから薬屋があったことは知られているが、中世も後半になると、公家らの記録に薬屋・薬種商・薬売りなどがあらわれる。大和ではこのころの記録が少ないために、さほど知られていない。

やはり、ここでも器用に多種の薬を扱っていた英俊の『多聞院日記』をみなくてはならない。その英俊のもとに入っていた薬屋あるいは薬種屋の名まえは甚介・宗勤・宗芳(下御門住)・松千代・宗方らである。なかでも、天正九年(一五八一)正月十九日条では薬屋宗芳の父禅門が八五歳で死去したので、「不便之至也」とのべている。天正二十年六月一日の条では、「小西薬屋宗方女房産後死了、助二郎妹也、不便々々」というほど薬屋は英俊にとって便利な存在であったのだろう。

英俊は、これらの薬屋を通じて薬を購入していたが、たとえば天正十七年正月二十四日には「郡山薬屋ニテ雷丸半斤ヲ廿文ニ買了。(宗方ハ一両ヲ十二文ニウル) 中く中ノ事也」といい、天正十九年八月二十五日にも郡山薬屋で買い入れている。どうやら郡山の薬は安かったようである。安いといえば堺の方がはるかに安価であった。そのころ唐物からものの薬種が堺へ

集まったからであろう。

天正六年八月十二日には「堺ヨリ蜜十五兩買了、十兩二升五合ニアタル歟」とか、天正八年正月九日「堺ヨリ与一薬買テ帰了、一段安ク調了、密上<sup>(マ)</sup>ミ三斤五十目ヲヒタ一貫四百文、米ニテハ四斗九升ニ当ル、余ノ薬種モ奈良トハ一倍ニアマリテ安也」と安さを書いている。文禄五年二月には堺の小西橋左衛門所とあるから、そのころには特定の薬屋がきまっていたのだろう。

それらの薬種はふだんは、掛買いをしている、不定期ながら支払いをすましている。いっぽう多聞院の英俊のところに、緊急に薬をもらいにきたり、また養生<sup>(生)</sup>薬を与えても、そのつど代価は受けていない。ときにお礼の品物をいただいて喜んでいる。英俊自身も法類の知人からであろうか、薬を頂戴して、あとでお返しをしている。京都の公家たちだけではなく、奈良でも贈答用であったことがわかる。英俊はせつせと自分の養生薬はもちろん、いわば寺院の施薬を一生けんめいにつくり出していたといつてよいのだろう。

そしてさきの一条兼良が『尺素往来』でいうように、「火うち袋や小薬器に薬を入れて、必ず携帯をする。持たないのは恥である」とさえなってきた。人びとは、常備薬を携帯するほどに、薬は普及してきたのであった。

南蛮医学の 一五二五年（大永五）ごろ、アルメイダはポルトガルのリスボンに生まれ、二二歳のとき外科医のアルメイダ 免許を得た。二年後、貿易商としてインドへ出発、しだいに財をなしたと伝えている。

一五五五年（弘治元）にアルメイダは日本にきた。かれはかねてからイエズス会の布教に関心をもっていたので、日本へきてもはじめは貿易をつづけながら布教したようだ。かれは豊後府内<sup>(現大分市)</sup>では貿易の利益をつぎこんで、乳児院を建設し、孤児や棄児の救済にあたった。ここでアルメイダは治療もおこなったが、診療を求める人も多く、二

年後には病院をつくり診療活動の規模をひろげていった。のちに豊後府内病院とよばれるが、豊後領主の大友義鎮が宣教師に与えた土地に建てられている(『大分市史』)。

この病院の医師にキョウゼン(のち、洗礼をうけ、てパウロという)がいた。かれは、もと大和の多武峰の僧侶であったようだ。どうして、この地にきて医師になったのかはわからない。キョウゼンは内科を担当していたから、西洋医学の薬剤も扱うことがあったが、和漢薬の処方もしたことだろう。キョウゼンは間もなく病いで倒れ、ミゲル(洗礼)が代行し、そのあと内田トメーという年配の漢方医が治療にあたったというから、日本人のキリシタンが、この地では相当の医薬知識をもち、人びとの医薬活動に参加できたのだと考えられる。

アルメイダは、日本へきて、はじめてイエズス会の会士になったのであるから、その修業をも、しなくてはならなかった。したがって、積極的にアルメイダは日本人が代診をつとめられるように、医術の教授をすすめていたこととおもわれる。いまは、かれの病院の規模とか内容はわからなくなってしまった。ただ、慶長年間の終りごろ(一六六二—一六六四)、日本にきて布教していたクリストファン・フェレイラが、のちに捕えられ、いわゆるコロビバテレンになった。日本名を沢野忠庵とよび、南蛮流医術の開祖といわれる。かれの治療法はアルメイダのものと変りがないようだとしたら、一般的な漢方治療は、伝統をもった日本式で、ちがうのは、いわゆる外科的な方法ですすんだものと考えてよいのだろう。

一五六〇年(永禄三)、イエズス会は宣教師たちに日本での医療事業禁止令を出したので、アルメイダも病院から去り、日本人の経営となった。アルメイダはもっぱら布教のために西日本各地に出向いた。各地でアルメイダの医者としての名声を聞いた人が治療を求めたから、布教に支障がないどころには、かれも応じたという。

そのアルメイダが一五六五年（永祿八）四月十日夜、雨中のなか奈良に入った。翌日には松永久秀の多聞城（いまの奈良市立若草中学校のところに）を訪れ、その壮大さにおどろいている。あと興福寺・東大寺をまわり、宇陀のキリシタン大名の高山右近（一五三〇—一五九一）をたずねた。このとき、アルメイダが西洋医薬などのことを語ったり、サンプルを与えたり、さらには直接、大和の人を西洋医学で治療などをしたことはあったかも知れないが、これをうらづける史料はない。アルメイダは一五八四年（天正一二）に天草で死亡、五九歳であった。

これらの話はアルメイダが各地での見聞を上級司祭に報告した。手紙のなかに誌るされているそれがフロイスの『日本史』にまとめられた。その手紙の写本はポルトガルのリスボン西郊アジュダ王宮図書館にある。